はじめに

「こどもまんなか社会」の実現を！と、子ども家庭庁が呼びかけています。こどもまんなか社会が本当に実現するなら、いつでも子どもや大人が集まっていて、楽しい声が聞こえてくるような「ほんものの広場」が、地域のまんまんなかにあるのではないかと想像します。

今年度は、短大保育科の学生の皆さんが中心となって、7 月には「とことこサマーフェスティバル」、11 月には「こどものあそびばトコたんランド」、1 月には「こどもかぜのこまつり」という、3 つの「こどものための楽しい場づくり」を行い、たくさんの子どもたちや親子が楽しい時間を過ごすことができました。また、10 月の保育学部生の企画による「トコトコの森プロジェクト」にも、短大生がたくさん参加してくれました。

私は、愛知県常滑市という町で幸せな子ども時代を送った話を、前号の「はじめに」に書きましたが、今年もその続きの話です。私の生家のある町内に、「山方会館」という公民館的な建物があり、そこには桜の木、遊具がある広場、小さな池とそのまんなかに鎮座する焼き物でできた弁財天、祭礼の山車の車庫がありました（今もあります）。4 月上旬の春の祭礼では、そこから山車が出発し、桜が映えてきれいでした。5 月の連休には、弁財天の祭礼「こどもまつり」がその広場で開催され、弁財天は技芸の神様だということで「作品展」がありました。町内の子どもたちは半強制的に習字と絵を出品することになっていて、私も友達も、毎年定番で春の祭礼の絵を描いていました。さて、「山方会館」の広場は、まさに子どもの遊び場でした。子どもが子どもだけで遊ぶのは当たり前で、皆、自転車で乗り付けていました。「グローブジャングル」という、球形でぐるぐる回転するシャングルジムがあり、やんちゃな男子はそれにつかまって全力で回し、スーパーマンになっていました（遠心力で身体が宙に浮くのです！）。夏休みに入ると、盆踊りの練習がその広場で行われ（練習が終わると、ソーダ味の水色のアイスがもらえました）、夏休みの終わりには「おじぞうさん（一般的には「地蔵盆」といいます）」という、町内のお地蔵さんを回ってお菓子をもらう子どものおまつりがありました。また、10 月の秋の祭礼では神楽を御嶽神社に奉納しますが、女子がお囃子のおじさんと一緒に舞の練習をするのも「山方会館」でした。こうやって思い出していくと、私が子どもの頃の「山方会館」の広場は、夢のように楽しいことが満載の子どもの遊び場でしたが、大人もしょっちゅう集まる、みんなの大切な場所だったのです。

先日、久しぶりに「山方会館」を訪れました。弁財天は変わらぬ姿でしたが、大きな変化は、弁財天を囲む「金網」がなくなっていたことでした。その金網は、ボールが当たって弁天さんの琵琶の先が欠けないように、池に落ちたボールを取ろうとして子どもが水際に入ることがないようにするためのものでした。金網のない弁天さんはすがすがしく見えましたが、響く子どもの歓声も遠い昔のこと。少し寂しく思っているかもしれません。

今年度を振り返り、保育科のみなさんが、「子どものための広場」を、たくさん創出してくれたことに、心から感謝します。子どもたちが「生きることは楽しい」と思えるようにと願い、世の中を支える人になろうとしている皆さんを、心から応援します！

文責：保育研究会会長（保育科科長）　遠藤　知里